

の地で新たな生を得たことを喜び、著者の黒タイ文献研究のさらなる展開を期待したい。

(岡田雅志・大阪大学大学院文学研究科)

### 参考文献

樫永真佐夫. 2003. 「(注釈) クアム・トー・ムオン——ムオン・ムオイの黒タイ年代記」『ベトナムの社会と文化』4: 163-243.

岡田雅志. 2012. 「タイ族ムオン構造再考——18-19世紀前半のベトナム, ムオン・ロー盆地社会の視点から」『東南アジア研究』50(1): 3-38.

齋藤 晃 (編). 2009. 『テキストと人文学——知の土台を解剖する』東京: 人文書院.

床呂郁哉; 西井凉子; 福島康博 (編). 『東南アジアのイスラーム』東京外国語大学出版会, 2012, 414p.

東南アジアの文化や社会、そして政治を理解するうえで、イスラームに着目することの重要性は大きくなっている。東南アジアにおいて、イスラームの宗教的営為を重視する生活習慣は、年々広がりを見せている。ヴェールを着用する女性の割合は増加し、イスラーム関連書籍の市場は拡大の一端を辿っている。また、イスラーム金融が最も盛んな地域のひとつが、東南アジアである。さらに、イスラーム世界において最大のムスリム人口を擁するインドネシアでは、バリ島で爆弾テロ事件が2回発生し、2009年には、首都ジャカルタでも外資系ホテルで爆弾事件が起きた。いずれもイスラーム過激派による犯行とされ、9.11同時多発テロ以降、国際社会の大きな注目を集めている。また、フィリピン南部では、少数派のムスリムによって分離独立を求める武装闘争が続いている。以上のように、東南アジアにおいて、イスラーム的規範が社会の広範囲に浸透し、政治的、経済的に重要な意味を持つようになった。言い換えるなら、現代の東南アジアを語る上で、イスラームは看過できない重要な要素となっている。

東南アジアのイスラーム研究の嚆矢となったの

は、紛れもなくクリフォード・ギアツの研究であろう [Geertz 1960]。その後、各国社会における個別の事例研究が蓄積され、それと同時に、東南アジア全体のイスラームを扱った研究も上梓されるようになった。たとえば、初学者に向けた概論 [Hooker 1983] や、9.11後の東南アジアにおけるイスラームの変容を、政治と社会の双方から論じた論集 [K.S. Nathan and Mohammad 2005]、そして、東南アジアのイスラームが中東地域との関連性に基づいて発展してきた点を明らかにした論集 [Tagliacozzo 2009] などがあげられる。

本書は、こうした研究蓄積を踏まえ、東南アジアのイスラーム、そしてムスリムによる多様な宗教的営みを包括的に描き出し、各国社会を構成するうえで不可欠な要素のひとつとして位置付けることを試みた論集である。現地調査にもとづいた人類学的研究、歴史学や政治学など、異なる研究方法をとる執筆陣が、それぞれの観点から東南アジアのイスラームについてアプローチしたのは、邦書としては本書が初めてである。その点で、研究者や大学院生に加えて、学部生や駐在員などの企業関係者を広く対象読者とした本書は、極めて画期的試みとして位置づけることができるだろう。

以下で、本書の内容について簡潔に紹介している。

本書は、5部16編の論文から構成される。第I部の「イスラームと知の伝達」では、イスラームの知を中東地域から東南アジアに伝える役割を担う留学と、宗教書の流通について3論文が収められている。第1章では、エジプトのアズハル大学へ留学したフィリピン・マラナオ社会のムスリムを分析した。マラナオ社会のムスリムにとって留学は、達成すべき目標であると同時に、留学先では広範な人的ネットワークが構築されていることが明らかにされた。第2章では、インドネシアからイエメン・ハドラマウト地方への留学生が増加している点に焦点をあて、留学がイエメンからの移民の子孫に限定されない、より開かれたものとして人々に選択されていることが明らかにされた。第3章では、19世紀から20世紀の島嶼部において、宗教書であるキターブの流通が当該社会のイスラーム化に影響を与えていることが浮き彫りにさ

れた。

第II部の「紛争と平和構築」では、マイノリティとしてのムスリムが分析の対象となっている。第4章では、フィリピン南部で継続するミンダナオ紛争において、分離独立運動と連動したイスラーム運動の実態が明らかにされた。次の第5章、第6章の両編は、いずれもタイ南部が舞台である。第5章では、ムスリムと仏教徒の通婚や暴力事件についてフィールド調査をもとに考察し、国家によるムスリムへの偏見が、南部のローカルな文脈においても再生産されていることが指摘された。第6章では、タイ南部のイスラーム教育の中心であるパタニにおいて、国家が長らくムスリムを辺境化した結果、教育のあり方に変容がもたらされていることが明らかにされた。

第III部の「イスラームをめぐる法と政治」では、各国家の公共的領域におけるイスラームの役割が取り上げられている。第7章では、フィリピン国内のイスラーム法制度適用を、シャリーア裁判所の設置に着目して分析した。そして、シャリーア裁判所という制度が存在することによって、ムスリム女性が自らの権利を主張する場が担保されていることが明らかにされた。第8章では、米国植民地下のフィリピンでアラブ系米国人の行政官であったナジェーブ・サリビーの著作を精査し、サリビーがモロを周縁化された存在として位置付けることで、モロの復興を主張したことが示された。第9章では、民主化後のインドネシアにおけるイスラーム政党の発行する出版物の動向を分析し、政治イデオロギーだけでなく、娯楽的要素が多分に含まれていることから、政党が人々の嗜好を反映させた戦略的出版を行っていることを明らかにした。第10章では、東南アジア6カ国におけるイスラーム裁判制度の特徴を俯瞰し、それぞれの共通点と相違点、特徴や課題が検討された。

第IV部の「イスラームと社会」では、主として民族誌的、社会学的手法にもとづいて、各国社会のムスリムによる日常的な宗教的営為が論じられている。第11章では、マレーシアの中間層が住む郊外のニュータウンにおいて、礼拝所であるスラウを中心に住民コミュニティが広がっており、コミュニティが、スラウを核とする宗教的ネット

ワークと住民組織、そして地方政治の連携のもとに構成されている点が指摘された。第12章では、インドネシアのジャワにおいて、女性のヴェール着用率が拡大した要因について、通説である女性の主体的選択、というよりはむしろ、近年ではヴェールを着用しなければならないという内外の圧力が拡大するなかで、ヴェールの着用が社会規範になりつつある実態が描き出された。第13章では、タイ南部の一村落后におけるダブリーギー・ジャマートの宣教活動に着目し、宣教活動が村落の政治・社会、経済、信仰のあり方に変容をもたらした点が綿密なフィールド調査によって明らかにされた。

第V部の「イスラームとビジネス」では、近年東南アジア経済の大きな潮流となりつつあるイスラーム金融やハラール・ビジネスについて論じられている。第14章では、マレーシアにおけるハラール認証基準をめぐる、各国・地域間の思惑や利害関係の対立により国際連携や統一基準策定が困難である実態が明らかにされた。第15章では、前章と同じくマレーシアにおけるハラール政策を、国民統合と国際社会における同国の地位確立を同時に成し遂げようとする国家プロジェクトであると位置づけた。第16章では、マレーシアとインドネシア両国のイスラーム金融に関して、統計データをもとに両国におけるイスラーム金融運用の実態について明らかにされた。

以上のような多様なテーマを扱った本書の意義は、次の2点に整理できるだろう。

第1に、東南アジアのイスラームについて多角的かつ包括的に論じた概説書として位置づけられる点である。イスラームに関する基礎的知識を知るためのコラムも充実しており、初学者、専門家の双方にとって随時参考に値する書籍と言える。また、近年、国際的なイスラーム主義運動との連動性において注目されるフィリピンやタイ南部の紛争、そして東南アジア経済を席捲しつつあるイスラーム金融といった重要なテーマにも目配りがされ、豊富な事例が紹介されている。

第2に、イスラームが関連する多くの文化・社会・政治的な問題に対して、多様なディシプリンからアプローチしたことで、結果として東南アジ

アのイスラームの多様性を浮き彫りにすることに成功している点である。

こうして本書は、あらゆるかたちで社会に介入するイスラームと、その宗教的営為の主体であるムスリムを十分に理解することなく、各国の社会、さらには東南アジア自体を語ることは困難である、ということを示しているのである。

他方、本書にはいくつかの問題もないわけではない。

第1に、欧語による先行研究との差異化が必ずしも明確ではない点である。冒頭で取り上げた先行研究でみられた東南アジアのイスラームの概説と比較して、新たに明らかになったのは何か、若干不明瞭である。邦書としては初めての試みとはいえ、先行研究との差異化に明言しておくことは必要と思われる。

第2に、東南アジアのイスラームを包括的に論じるとした本書の位置づけにもかかわらず、提示された事例に偏りがみられる点である。具体的には、第1部において3編の論文のうち2編は、いずれも現代の中東地域への留学が対象とされており、その他1編は宗教書をめぐる歴史の変遷が論じられている。「イスラームと知の伝達」というタイトルから、中東留学によって得られた知と、本国における知の再生産の様相、あるいはイスラーム教育の実態に関する内容を読者は想像するが、本書ではいずれも取り上げられていない。また、東南アジアにおけるイスラーム教育は重要な論点だと考えられるが、本部ではその記述はみられない。

第3に、多彩な事例を提示することによって東南アジアのイスラームの多様性が浮き彫りとなったものの、多様性が何を意味するのか、また、多様性を踏まえたうえで、東南アジアのイスラームとは何なのか、といった踏み込んだ議論はなされていない点である。多様性を提示した個々の事例が、翻って東南アジアのイスラームに対する一貫した視点の構築を困難にしている。言い換えるなら、本書は東南アジアのイスラームを考察するうえで重要なポイントを明示しているものの、それが東南アジアのイスラームを総体的に理解することには必ずしも繋がらないのである。もちろんこれらの問題点は、極めて困難な課題であることは

評者自身も理解している。しかし、これは今後の東南アジアのイスラーム研究において取り組むべき重要な課題であることは間違いない。

とはいえ、評者によるこのような批判は、本書の意義を貶めるものではない。逆に、本書は今後の東南アジアのイスラーム研究を志す初学者に対する導きの書であり、何よりも邦書としては初めて東南アジアのイスラームを包括的に扱った研究、として極めて重要な成果である。ぜひ多くの読者に読まれることが求められる。

(木下博子・京都大学イスラーム地域研究センター)

#### 参考文献

- Geertz, Clifford. 1960. *The Religion of Java*. Chicago: University of Chicago Press.
- Hooker, M. B., ed. 1983. *Islam in Southeast Asia*. Leiden: Brill.
- K. S. Nathan; and Mohammad Hashim Kamali, eds. 2005. *Islam in Southeast Asia: Political, Social and Strategic Challenges for 21<sup>st</sup> Century*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- Tagliacozzo, Eric, ed. 2009. *Southeast Asia and the Middle East: Islam, Movement, and the Longue Durée*. California: Stanford University Press.

飯國有佳子、『現代ビルマにおける宗教的実践とジェンダー』東京：風響社，2011，316p.

本書は、現代ミャンマー（本稿では「ビルマ」ではなく「ミャンマー」を用いる）でのフィールドワークに基づき、農村社会の特に女性の宗教実践について明らかにした民族誌である。著者も指摘するように、ミャンマーの宗教研究においては、上座仏教と精霊信仰を二項対立的にとらえ、男性が仏教に、女性が精霊祭祀に関与するという図式で説明する傾向が見られた。そして出家可能な男性こそ「正統」な仏教の担い手であると研究者に認識され、出家できない「二級の仏教徒」としての女性は研究対象になりにくかった (p.2)。これに対し、著者は本書で女性の実践に注目し、「これ